

ダブルループ学習を促すソーシャルワーク演習教育の試み

— 相談援助演習IVを通じて —

島根大学 黒田 文 (002095)

[キーワード] ソーシャルワーク演習教育、ダブルループ学習、テキストマイニング

1. 研究の目的

ソーシャルワーク実践は、自己の外に対して働きかける実践であると同時に、その働きかけをもとに、自分と働きかけの関係性について問い直し、また、組み直す必要性を迫られる実践である。ショーン(1983)は、実践と省察の反復により実践知に対する問いを拓いたが、実践と省察を重層的に織りなす行為は、ソーシャルワークの実践においても求められるものである。なぜなら、ソーシャルワーク実践で扱われる生活問題は、科学的知見などの確実性が適用されにくく、介入の過程では文脈依存性や価値の多元性、独自性が現れやすい。それゆえ、ソーシャルワーク実践は、自己の内なる問い直しの結果を再び実践へと帰帰させていく再帰性が強く意識され進行するからである。

上記の再帰性は、生活問題の解決に向けて、複合的な文脈で展開されるソーシャルワーク実践の過程に常に横たわっており、その実践に対しては高次の内省的態度や判断が強く要求される。そうであるならば、ソーシャルワークの教育において、より実践に即した相談援助演習(以下、演習と記す)のあり方を考えるのであれば、自らの実践に対する内省、および、その内省に基づいて(再び)実践化される技能について考える機会を演習において作り出し、学生が内省的行為を学びのなかで内在化して身に付けていく教育機会を積極的に提供する必要がある。そのためには、学生が「どうやったら上手くいくか」という問題解決に役立つ知識や技能を得る「シングルループ学習」だけでなく、「何のために、なぜ、自分はそれを用いるのか、こだわるのか」という自らの既存の「前提」に目を向け、自分の実践の視点や枠組みについて検討する「ダブルループ学習」を行う必要がある。Argyris(1999)は、「変化」を直接的な行動の変化と新たな意味認識の変化の2種類にわけ、「シングルループ学習」が所与の前提範囲内における試行錯誤の学習であるのに対し、「ダブルループ学習」は、前提となる概念や手段の妥当性や適切性を検討の対象にすることで、自らの行動の支配変数を変えようとする学習だと説明する。いわば、「ダブルループ学習」は、自分のパラダイムを変換しようとする作業に匹敵する。上記で述べた再帰性を伴うソーシャルワーク実践へ将来的に身をおくであろう学生にとっては、早い段階からダブルループ学習に触れておくことが重要だと考えられる。そこで本研究では、ソーシャルワークの演習教育にダブルループ学習を取り入れる試みについて考える。

2. 研究の視点および方法

ダブルループ学習では、自らがそれまでに行動の指針としてきた前提概念・理論や自らの行動を規定している前提概念・理論を自覚することが必要である。そこで本研究では、演習の受講生が、演習を受ける以前に持っていた自分の前提や考え方(パースペクティブ)に着眼し、それらが演習後に変容を遂げるのかということについて分析・考察した。

2.1 分析の対象と方法

社会福祉士養成校であるA大学において、2014年度に実施された演習IV(実際の開講科目名は社会福祉援助技術演習IVである。授業の概要については当日説明するが、主にグループワークの技能に焦点をあてている)の全受講生に対し、演習を受講する前に自分が持っていたグループワークに対する考え方について記述してもらい、演習を経てグループワークに対してどのように考えているかについて記述をしてもらった。また、受講生には、グループワークに対する考え方に変化があ

るとすれば、どうしてそれがおきたのか、何（演習の状況やきっかけを含む）によって変容（行動の変容、考え方の変容）が生じたのか等について記述するレポートを提出してもらった。

分析では、受講生の記述についてテキストマイニングを用いて分析、考察をした。分析の視点は1) 演習前のパースペクティブ、2) 演習後のパースペクティブ、3) 演習の過程（気づきと思案）、の3点である。

3. 倫理的配慮

受講生に対しては、レポートの内容が研究の対象となること、および、研究の目的、匿名性の確保、結果公表の方法等について事前に説明して調査協力を仰いだ。特に、調査に協力をしなくても成績の評価には影響しないことを伝え、調査協力に同意がえられた学生レポートのみを分析対象としている。さらに、演習指導者にとって耳障りな内容であっても、建設的コメントであれば内容は高く評価されること、また、今後の演習教育を向上させるために受講生からの忌憚のない意見が必要であることを伝えている。データについては、必要に応じて開示できるように管理・保存をしている。

4. 研究結果

グループワークに関する記述内容については、演習前と演習後で変化のあることが観察された。変容がみられたのは、主に、リーダーもしくはファシリテーターのグループに対する影響力、グループにおけるメンバーの意見の扱い方、リーダーシップのあり方、メンバー間の意見の対立に関することである（図1を参照）。パースペクティブが変容する過程で、自分の前提に対する具体的な気づきや思案として挙げられたのは、グループをどう観察するか、グループプロセスを構造化する、グループは誰によって築かれるか、対立により質が向上する、等の内容であった（図2を参照）。

5. 考察

ソーシャルワーカーには、高度な複雑さと曖昧さの中で、自分の実践や決断について内省しながら問題に取り組む能力が求められる。社会福祉士の養成を目指した教育では、ややもすると、試験を意識した結果、知識や技術の伝達を学習の到達目標に設定してしまいがちだが、演習では、体験学習を基盤にして学生の既存の前提に揺さぶりをかけることが可能である。演習を通して、自分の認識枠組みに対する吟味や問い直しを行い、認識の変容プロセスを体験することは、上述した「自己の内なる問い直しの結果を再び実践へと回帰させていく（ソーシャルワーク実践の）再帰性」を意識する土壌になりうるのではないだろうか。

文献一覧

Argyris, C. (1999) On organizational learning. Backwell Business.

Schön, D.C. (1983) The reflective practitioner: How professionals think in action. Basic Books. (=2007, 柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的实践とは何か：プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房.)

